り、この藤蔓は通藥なれども、其實は多く食しても瀉下する事なくして、油には大便閉に用ひて佳なるべしと佐竹壹岐守醫冠木精菴の說なり、あけびかづらは處々に自生多きものなれども、年を經し蔓にあらざれば、實のらぬものなり、花は年をへざるつるにも開く、花信は淸明の比よりひらく、その色淡紫紅にして三瓣の小花、さがりあつまり開く、その小花と同じ形狀にして、大さ寸許のものあり、この大輪の花は小花のかたより濃紫なり、この種は實を結ぶ花なれども、年を經し蔓にあらざればみのらず、又淡碧白のものあり、その形狀種類は、本草綱目啓蒙に詳なれども、出羽の國には、實も大にして、四五寸許のものあり、その色も紫色にして美なるあり、この紫色に染なして美なるものは、味美なりといへり、凡通草に三葉五葉の別あり、五葉のもの、實は、熟して皮われ、白瓤あらはるゝものといへども、其皮褐色少は紫色を帶れども美色ならず、いまだ三葉のあけびの實を結びしを見ざれば、三葉のものにやと問ふに、過し事にて葉の三葉五葉のことは、わきまへずといへり、核は黑澤にして升目のごとし、破れば內に白肉あり、卽油を取ものなり、○中略

和名抄蔬類郁子の次に蔔子、和名阿介比又同書葛類通草和名阿介比加都良と訓じて、實と蔓とを別條となしたれば、古は專ら食用とせしものなり、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略龍膽、通草各五斤、　大和國卅八種、○中略枳實、通草、大戟各十斤、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　木通（あけびかづら）

〔倭名類聚抄十七蔬〕郁子　本草云、郁子一名棣、都計反、和名牟閉、今案郁宜作棣、於六反、見唐韻、

郁子

〔箋注倭名類聚抄九果蔬〕按廣韻、郁文也、亦郁郅縣在北地、又姓、又云、栯栯李、俗作棣、二字其義不同、故源君謂郁子之郁宜作棣、然郁棣字古所無、說文不載、故本草借右扶風郁夷縣之郁字爲之也、間居賦亦云、梅杏郁棣、其訓文也、之郁字亦假借、說文檍有文章也、是爲正字、○中略千金翼方、證類本草木